

## 翻訳困難な表現： «disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Isaac» についての考察 －『スワン家の方へ』「就寝劇」の場面－

Réflexion sur l'expression difficile à traduire: «disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Isaac»  
－ La scène du « drame du coucher » dans *Du côté de chez Swann*－

青柳 りさ  
AOYAGI Risa

### 0 テキストの違和感

私が『失われた時を求めて』を原書で読み始めたのは45年ほど前だが、その頃からずっと違和感を覚えている場面がある。物語の冒頭部分で、主人公が母親におやすみのキスを求め、階段の上で母を待ち伏せする。それを父親に見つかり、万事休すと思った瞬間、父親が思いがけず「この子と一緒に一緒におやり」と母親に言う。その夜、母と子と一緒に夜を過ごす。研究者たちが「就寝劇」とよんでいる場面である。

父にお礼を言えなかった、父が感傷癖と呼ぶようなまねをしたらかえって父を苛立たせていただろう。私は身じろぎもせずいた、父はまだ私たちの前に立っていた、どっしりと、白い寝巻を着て、神経痛を患って以来用いるようになった紫と薔薇色のインドカシミヤのスカーフを頭に巻きつけて、スワン氏が私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製版画のなかの、サラにイサクから身を離すように言っている (disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Isaac) アブラハムの仕草で。あれから長い年月が経った。父のもつ蠟燭の光の影が登ってくるのが見えた階段の壁は、もうずいぶん前から存在しない<sup>1</sup>

まず第一に気になったのが、「白い寝巻を着て、神経痛を患って以来用いるようになった紫と薔薇色のインドカシミヤのスカーフを頭に巻きつけて」と

いう描写である。色のイメージが強かったため、薔薇色と紫色に何か象徴的な意味があるのか、あるいは当時の流行だったのかを調べてみたが、該当するものは見つからなかった。一方で、神経痛というのは、本人には痛みがあるものの、生命にかかわるものではなく、周囲から見るとどこか気の毒で威厳に欠け、少し滑稽に映る。また、このスカーフの色も、威厳ある父親の描写としてはやや奇妙に感じられた。

第二に、「サラにイサクから身を離すように言っているアブラハムの仕草で」という箇所である。語り手の父親は「子供の方へ行っておやり」と言っているのに、なぜイサクから離れるように言う仕草に例えているのか？ また、父親が、威厳をもって母と子を近づけようとしている状況にも微妙である（この後の展開は近親相姦を予感させる）。さらに、なぜ、「se départir de」で十分なところを、「se départir du côté de」という複雑かつ曖昧な表現になっているのかも疑問である。

第三に、「ベノッツォ・ゴッツォリの複製版画のなかの」と記述されているが、「アブラハムがサラにイサクから身を離すように言っている」という場面と一致する版画は実在しない。このシーンはラスキンによるベノッツォ・ゴッツォリのフレスコ画からの複製版画が参考にされたと考えられるが、状況とは一致していない。版画では、アブラハムは腕を組んでおり、場面もイサク誕生前のものである。天使た

ちがアブラハムにイサクの誕生を予告し、その後、二人の天使がソドムへと向かう場面が描かれている。

小説の世界が現実と一致する必要はないが、なぜこのような変更が加えられているのかを考察することは、小説世界の創造に深く関わるものだと思う。

## 1 草稿を参照する

このテキストがどのように成立したかを、カイエ6（1909）とカイエ8（1909）に確認したい。

父にお礼を言うことも、キスをすることもできなかった。そんなことをしたら父を苛立たせることになっていただろう、父はそのような感情表現を馬鹿げたことだと言っていた。でも、あの晩私が父に感じた以上の無限の感謝の気持ちを他の人に抱くことはないと思う。もう何年も前のことだ。あの出来事があった家はもう存在しない。そして、このことについて私の記憶の中にまだ残っている映像（l'image qu'il y en a dans mon souvenir）が、唯一残っている「証拠」なのかもしれない、そしてそれはまもなく破壊されてしまうだろう。そのような時間の可能性は永遠になくなってしまった。<sup>2</sup>

カイエ6（1909）の段階では、エピソードは存在するものの、それが映像として表現されているわけではない。ただ、「父に感謝できなかった」という思いと、そして「そのような時間が二度と訪れることはない」という思いが述べられている。また、「このことについて私の記憶にまだ残っているイメージは、唯一残された『証拠』かもしれない。そしてそれはまもなく消えてしまうだろう」という語り手の感慨からもわかるように、その場面の映像は、語り手の心象にのみあり、近いうちに失われてしまうだろうと語り手は予感している。

ついで、カイエ8を参照する。

父にお礼を言うことはできなかった、そんなことをしたら父を苛立たせることになっていただろう、父はそんな感情表現を馬鹿げたことだと言っていた。でも、あの晩私が感じた父への感謝以上の感謝の気持ちを、他の人に対して抱くことは

ないだろう。私は言葉を発することもできず立ちすくんでいた。父はまだ私の前に立っていた、背が高く堂々としていて、神経痛になってから頭に巻いていたインドカシミアのスカーフに白い寝巻を着て、黒い髭を蓄え、サラに立ち去るように言うアブラハムの仕草で。あれからもう随分の年月が経った。父の持つ蠟燭の光が登ってくるのを見た階段は、とうの昔に破壊されてしまった。そして、父が母に「あの子と一緒に  
行っておやり」と言うことはもうない、母が私のところに来てくれることも、もう二度とない。あの場面を構成していたものはもう何も存在しない。そんな時間の可能性は永遠に消滅してしまった。<sup>3</sup>

カイエ6で「まもなく消えてしまうだろう」とされた「イメージ」や「証拠」が、「カイエ8」において映像を伴って回復される。「カイエ6」にはなかった父の姿やその場の情景、失われるかと思われた光景が、創世記のアブラハムの姿を借りて映像化されている。それは失われつつあったものが見出され、保存された瞬間でもある。ただし、創世記にはアブラハムがサラに「離れるように言う」という場面は存在しない。一つの記憶が映像のように再現されると同時に、創作された要素が加わっていることがわかる。

再び決定稿を参照する。

父にお礼を言うことができなかった。そんなことをすれば父を苛立たせていただろう、そのような行為を父は感傷癖と呼んでいたから。私は身動きもできず立ちすくんでいた、父はまだ私たちの前に立っていた、どっしりと、白い寝巻を着て、神経痛を患って以来用いるようになった紫と薔薇色のインド製カシミアのスカーフを頭に巻きつけて、スワン氏が私にくれたベノツォ・ゴッツォリの複製版画<sup>4</sup>にある、サラにイサクから身を離せと言っているアブラハムの仕草で。あれから多くの年月が経った。父のもつ蠟燭の光の影が登ってくるのが見えた階段の壁は、もうずいぶん前から存在しない。

白いカシミアのスカーフが「紫と薔薇色」へと彩りを加えられ、その派手な色彩によって父の威厳が損なわれる。また、カイエ8にあった父の「黒い顎

鬚」も失われている。ラスキンによるベノッツォ・ゴッツォリの複製版画では、アブラハムの顎鬚は白いため、この変更は版画の影響によるものかもしれない。いずれにせよ、イスラエル人らしい黒い髭による威厳が薄れることになる。また、カイエ8で« se départir d'Isaac »となっていた言い回しが、決定稿では« se départir du côté d'Isaac »と読み違いを誘発しかねない曖昧な表現に変更されている。さらに、小さな変更点だが、カイエ8にあった蠟燭の灯りが階段をのぼってくる描写は、決定稿では壁に映った蠟燭の灯りがのぼってくると書き換えられている。実際の光景を思い浮かべると、語り手が、壁にぼうっと映る灯りが徐々に上がってくる様子を見ていた時の恐れを思い浮かべることができる。

このカイエ6から決定稿にかけては、もう一つおさえてきたい場面がある。母と息子の関係性を暗示する場面である。カイエ6では、夜、眠れない主人公のために母親が読み聞かせるのは、ジョルジュ・サンドの『魔の沼』である。しかし、より印象的なのは、翌朝の描写である。まるで一夜を過ごした恋人たちの迎える朝のような様子である。

私が目を覚ますと、ママのベッドは空っぽだった。ママは私が気がつかないうちに起きていたのだ。しかしシーツの上では太陽が美しい一日のありとあらゆる楽しみを約束するように、手に触れることのできる幸福のように、戯れていた。そしてテーブルの上には「狼さんが目を覚ましたら、すぐに着替えて。ママがお庭で待っているから」というメモがあった。錠戸を開けると、(…) 太陽の光が壁の格子に沿って金色のはしごを作っていた。それは、天使たちがバラやナスタチウムを摘みに来るために空から架けたようで、反対側から家を登ってきてママのベッドまで続いていた。<sup>5</sup>

カイエ8では、このような朝のシーンはない、お母さんが読み聞かせてくれるのはジョルジュ・サンドの『魔の沼』であり、この物語には近親相姦的な要素はあまりないように思われる。ただ、それを予見させるような一言がある。

しかし、ママンがベッドに入り眠りについた後も、月明かりに魅せられた森の下でのシャンピの魔法の夜 (La nuit magique de Champi) は、月明かりが私のベッドの上でその枝を黒く切り取ったマロニエの木陰で私が寝ているこの部屋の中で続いたのだった。<sup>6</sup>

と、どこからか「シャンピ」という一言が入り込んでいる。『魔の沼』には近親相姦的要素はないが、その夜の出来事は語り手にとって、育ての母親と主人公が結婚するに至るジョルジュ・サンドの物語、「シャンピの夜」だったのだろう。そして決定稿では母親が読み聞かせてくれるのは、『魔の沼』から『フランソワ・ル・シャンピ』に変更されることになる。

## 2 『創世記』から、「アダムとイヴ」

さて、作品の冒頭 I, 36-37には、『旧約聖書』『創世記』から、イスラエルの始祖とされるアブラハムの物語が示唆されていた(『創世記』17-24章)。そのさらに前、作品冒頭の2ページ目、I, 4-5に、アダムとイヴ(『創世記』第2章)に関する言及がすでに現れている。

時には、眠っている間におかしな姿勢になった私の太腿から、アダムの肋骨からイヴが生まれたように、ひとりの女がうまれることもあった。<sup>7</sup>

『創世記』の場面は以下の通りである。

### 『創世記』第二章

<sup>7</sup> 主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。

<sup>21</sup> そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。

<sup>22</sup> 主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。

このアダムとイヴへの言及は、すでにカイエ5 (Cahier 5, f° 111 v° 1908年末から1909年初頭)、カイ

エ 1 (*Cahier 1*, f° 70 v° 1909年)、およびカイエ 8 (*Cahier 8*, f° 3 r° 1909年)に確認できる。作品は冒頭から、世界の始まり、『創世記』のアダムとイヴを意識していたようである。そしてカイエ 5 の時点からほとんど文言は変わっていない。

« Quelquefois, comme Ève naquit d'une côte d'Adam, une femme naissait pendant mon sommeil d'une fausse position de ma cuisse. » (決定稿)

« Parfois, pendant mon sommeil, comme Ève sortit d'une côte d'Adam, une femme s'élevait d'une fausse position de ma cuisse. » (*Cahier 5*, f° 111 v°, 1908年末から1909年初頭)

« Quelquefois, comme Ève naquit d'une côte d'Adam, une femme naissait d'une fausse position de ma cuisse. » (*Cahier 1*, f° 70 v°, 1909年)

« Quelquefois, comme Ève naquit d'une côte d'Adam, une femme naissait pendant mon sommeil d'une fausse position de ma cuisse. » (*Cahier 8*, f° 3, 1909年)

当初から存在していた「アダムとイヴ」のエピソードは、その後、展開することはない。一方で、「就寝劇」の場面に加筆された「アブラハム」のエピソードは、カイエ 6 (1909)には存在せず、カイエ 8 (1909)から登場する。また、ベノッツォ・ゴッツォリの複製版画については、1913年のグラッセ版から登場する<sup>8</sup>。さらに、カイエ 6 で、母親はジョルジュ・サンドの『魔の沼』を読み聞かせているが、カイエ 8 ではそこにどこからともなく「シャンピの魔法の夜」という言葉が入り込み、決定稿では、『魔の沼』が『フランソワ・ル・シャンピ』に置き換えられることになる。3000ページに及ぶ長い小説の最後（最後から4頁目）で、主人公は『フランソワ・ル・シャンピ』を思い起こす<sup>9</sup>。意図していなかった要素が加わることでシーンが膨らみ、当初の構想にはなかった加筆と変更が、最終的には作品構造全体に関わる重要な役割を担うことになる。

### 3 『創世記』から、「アブラハムの物語」

では、アブラハムのエピソードとはどのようなものなのか。

「アブラハムの物語」は『創世記』14章から始まる。15章から17章にかけて、アブラハムに「子を与える約束」がなされ、18章から21章にかけてその約束が果たされる。アブラハムと女奴隷ハガルの上にイシュマエルが、アブラハムとサラとの間にイサクが誕生する。『創世記』を辿る。

#### 17章

<sup>4</sup> 「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう。

<sup>18</sup> そしてアブラハムは神に言った、「どうかイシュマエルがあなたの前に生きながらえますように」。

<sup>19</sup> 神は言われた、「いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう。

18章から21章にかけてはその約束が実現される。18章では、ベノッツォ・ゴッツォリの複製版画の場面が展開する。

#### 18章

<sup>1</sup> 主はマムレのテレビンの木のかたわらでアブラハムに現れた。それは昼の暑いところで、彼は天幕の入口にすわっていたが、

<sup>2</sup> 目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼はこれを見て、天幕の入口から走って行って彼らを迎え、地に身をかがめて、

<sup>3</sup> 言った、「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通り過ぎさないでください。

<sup>20</sup> 主はまた言われた、「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、

<sup>21</sup> わたしはいま下って、わたしに届いた叫びのとおり、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」。

<sup>22</sup> その人々はそのから身を巡らしてソドムの方に行ったが、アブラハムはなお、主の前に立っていた。





Abraham parting from the Angels<sup>10</sup>

続く19章では、「ソドムとゴモラ」の物語が挿入される。

このふたりのみ使は夕暮にソドムに到着する。ソドムには、正しい者が10人もいなかったため町が滅ぼされてしまうが、アブラハムの甥であるロトは正しい人であったために救出される。ただロトの妻は後ろを振り返ったため塩の柱となってしまう。ロトの娘たちは子孫を残すために父に酒を飲ませて父と交わり、姉妹は子を授かる。

#### 19章

<sup>30</sup> ロトはゾアルを出て上り、ふたりの娘と共に山に住んだ。ゾアルに住むのを恐れたからである。彼はふたりの娘と共に、ほら穴の中に住んだ。

<sup>31</sup> 時に姉が妹に言った、「わたしたちの父は老い、またこの地には世のならわしのよう、わたしたちの所に来る男はいません。

<sup>32</sup> さあ、父に酒を飲ませ、共に寝て、父によって子を残しましょう」。

<sup>33</sup> 彼女たちはその夜、父に酒を飲ませ、姉がはいて父と共

に寝た。ロトは娘が寝たのも、起きたのも知らなかった。

<sup>34</sup> あくる日、姉は妹に言った、「わたしは昨夜、父と寝ました。わたしたちは今夜もまた父に酒を飲ませましょう。そしてあなたがはいて共に寝なさい。わたしたちは父によって子を残しましょう」。

<sup>35</sup> 彼らはその夜もまた父に酒を飲ませ、妹が行って父と共に寝た。ロトは娘の寝たのも、起きたのも知らなかった。

<sup>36</sup> こうしてロトのふたりの娘たちは父によってはらんだ。

<sup>37</sup> 姉娘は子を産み、その名をモアブと名づけた。これは今のモアブびとの先祖である。

<sup>38</sup> 妹もまた子を産んで、その名をベニアンミと名づけた。これは今のアンモンびとの先祖である。

ソドムとゴモラの同性愛のテーマと、ロトと娘たちとの近親相姦のテーマが、アブラハムに子を授ける約束と、イサクの誕生のエピソードの間に挟まれて存在しているのである。そして21章においてイサクが誕生する。

#### 21章

<sup>1</sup> 主は、さきに言われたようにサラを顧み、告げられたようにサラに行われた。

<sup>2</sup> サラはみごもり、神がアブラハムに告げられた時になって、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

<sup>3</sup> アブラハムは生れた子、サラが産んだ男の子の名をイサクと名づけた。

22章では主がアブラハムにイサクを燔祭として献げるよう命じる。プルーストの、「サラにイサクから離れるように言う」というくだりは、このエピソードに由来するが、しかしこのエピソードのどこにもサラは登場しない。

#### 22章

<sup>1</sup> これらの事の後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。

<sup>2</sup> 神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。

<sup>10</sup> そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、

<sup>11</sup> 主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。

<sup>12</sup> み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。

ソフィー・デュヴァルは「就寝劇」の場面を以下のようにまとめている。

イサクのように、彼は父のナイフが自分に降りかかることを予期する。しかし、イシュマエルのように母と共に行き、最後にロトのように母（近親相姦）の側に向かう。こうして母親は息子と一緒になりつつ『息子の側を離れる』ことができる（« de sorte que sa mère peut « se départir du côté » du fils en le rejoignant »）。<sup>11</sup>

このような形で、デュヴァルは「« se départir du côté de »（息子から離れる）」と「« en le rejoignant »（息子と一緒になりつつ）」という逆の方向性を同時に進行させている。

ここで確認しておきたいのは、ベノツォ・ゴッツォリの複製版画が、アブラハムが母サラに息子から離れるよう命じる場面ではなく、アブラハムにイサクの誕生を告げる場面であること、また、子を授けるといふ予言と「イサクの誕生」の間に「ソドムとゴモラの物語」や「ロトと娘たちの近親相姦の物語」が挟まれていること、そして「« se départir du côté d' Isaac（イサクから離れる？））」という表現が非常にわかりにくいものであるということである。

#### 4 ベノツォ・ゴッツォリ『アブラハムの供犠（Le sacrifice d'Abraham）』

ピサのカンボサントにあるベノツォ・ゴッツォリによるフレスコ画『アブラハムの供犠』の複製版画（1838年）である。<sup>12</sup>



ライブラリー・エディションのなかで、このフレスコ画について語るラスキンの1845年の書簡が紹介されている。

あなたには推測できないでしょう（5月15日、彼は父に宛てた手紙の中で書いている）、この人たちがいかに聖書を読み込んできたのか、私がベノツォの「アブラハムの生涯」からどれほど深く家父長制の精神を引き出したかを。それは聖書そのものと同じくらい豊かで充実しており、欠けているものはないが、追加されたものはかなりあります。小さなイシュマエルが小さなイサクと闘って、サラを激怒させる場面は、そのような場面のひとつであり、聖書の「エジプト人の息子が遊ぶのを見た」（創世記21章9節）についての解釈です、しかしこれは荒野における祝福されたハガルへと引き継がれます。明日は彼の作品に取り掛かります。今日は簡単な部分を仕上げました（小さくてよくできているので簡単でした）。アブラハムが天使たちと別れて、天使たちがソドムに向かう場面です。アブラハムのもとには3人の天使が来たのに、ソドムへは2人しか行かなかったというのは、聖書の歴史に忠実な見事な描写です。（創世記18章2節、19章1節）このフレスコ画では、中央の天使が舞い上がり、ソドムのほうを振り返って手を上げて非難の姿勢をとっています。この構図は後にミケランジェロが『最後の審判』で採用することになります。二人の天使はソドムの方を向き、一人はソドムの街をじっと見つめ、もう一人はアブラハムを振り返っています。アブラハムは両手を組み、全幅の信頼とあきらめを抱いて背を向けているが、唇は震えるような苦痛を、目には憐れみを湛えており、私はこの絵を描いている間、何度も涙があふれてきました。この通路の壁の漆喰は、すでに壁から浮き上

がっており、年が明ける前には塵となってアルノ川に吹き飛ばされていることでしょう。<sup>13</sup>

ラスキンが模写しているのは、イサクの誕生以前の場面を描いたフレスコ画であり、『アブラハムの供儀 (*Le Sacrifice d'Abraham*)』の前に位置するものである。この書簡から、「年が明ける前には塵となってアルノ川に吹き飛ばされているだろう」との記述が読み取れる。このフレスコ画は1845年当時確かに存在しており、その時点ですでに劣化が進んでいたため、現在では見るができなくなっていると考えるのが妥当であろう。

## 5 吉田城、ジャン＝ピエール・リシャール、ソフィー・デュヴァルの見解

プレイヤッド版においても、このシーンについて、吉田城が注で詳しく解説している。

ベノッツォ・ゴッツォリ (1420または1422-1497) はフィレンツェの画家で、第二次世界大戦中に破壊されたピサのカンポ・サントのフレスコ画を担当した画家の一人である。そのうちのいくつかはアブラハムの生涯のエピソードを描いているが、ブルーストが言及した場面は含まれていない。創世記のテキストにも出てこない。ハガルとその息子イシュマエルの旅立ちは見られるが (G. Rosssi and G.P. Lasinio, *Peintre a fresco dei Camposanto di Pisa, Firenze, Tipographia alla insegna di Dante, 183*参照)。ここでの文化的参照は、家族の歴史の必要性に合わせて再構築されているようである。動詞「se departir」の古風な用法 (ラスキンがカンポ・サントで写生した別のスケッチのキャプションにある、英語の「parting」に由来しているのかもしれない)：「天使たちと別れるアブラハム (*Abraham parting from the angels*)」、J. Ruskin, *Works, Library Edition, George Allen*参照、は意味ありげな語彙の曖昧さを生じさせている、「se départir du côté de」という表現は「se départir de」(あるいは「se séparer de」)と「partir du côté de」という別方向の意味を併せ持ち、父親は母親に子供と一緒にやってやるように命令するので、この場面により適している。この曖昧さは、父親が結びつけ

ようとしているまさにその瞬間に切り離していることを示唆しており、生け贄を捧げるアブラハムのイメージを喚起する。<sup>14</sup>

ジャン＝ピエール・リシャールは、1974年の時点で、この場面とこの言い回しに注目している。

しかし、この裂け目 (別離の裂け目) を消すことに否定的な側面がないわけではない。

マルセルは母親を冒瀆していると感じている。「僕は、穢れた秘密の手で、彼女の魂に最初の皺を描き、最初の白髪を生やしたように思えた」(I, 39) 両親によるこの最初の放棄の後、彼は永遠の幼年期を宣告されたことを感じ、自覚する。というのも、主である父だけが、(気まぐれの恣意ではなく) 掟を課すことによって、それに伴う脅しによって、このあまりにも完全な母性世界への再浸透から子供を救うことができたからである。それゆえ、コンプレの場面における父の甘やかしは、現実には息子を見捨てることなのである。それは息子に、決して本当の意味で自分を解放することなく、魅惑的な円環 (そして常に再構築される：彼の周囲で織られ、眠らされ、記憶され、書かれる) から離れられないことを宣告する。お休みのキスのシーンのディテールの多くが、この読みを裏付けている。例えば、父親の外見である。神経痛で弱り、奇妙なヘアスタイル (紫とピンクのターバン) で女性化している。そして、芸術と宗教という二重の比喩的な表現に訴えている。ゴッツォリの版画は、存在しなかったかもしれない (存在しないこと自体に意味があるのかもしれない)。一方、アブラハムの神話と呼び起こすことは、彼が律法のために息子を生贄に捧げることを決意し、そうすることで息子を救い、成長させるという点で、不可欠である。しかしブルーストは、この神話をその意味を逆にするために使っている、それはブルーストのテキストの文面に表れている：「アブラハムのしぐさで...サラにイサクのそばを離れなければならないと告げる」。「Se départir」とは、別れを告げることであり、別離を意味する。しかしその一方で、「du côté de」は、ブルースト流の構文であり、望ましい傾向、再発見された愛着、帰属の意識を示している。このちょっとした意味上の混乱によって、サラのキスはもはや別れのジェスチャーとしてではなく、逆に復縁のジェスチャー、取り返しのつかない再出発のジェ

スチャーとして感じられるようになる。<sup>15</sup>

創世記にはサラのキスの場面などが存在しないことも含め、いくつか指摘すべき点はあるが、リシャールは1974年の時点で「« Se départir du côté d'Isaac »という表現がブルーストラしいものであり、双方向性を含んでいる」と述べている。そして、これは「アブラハムの供儀」のエピソードを逆転させ、意味的にも混乱を引き起こす表現である」と指摘している。

ソフィー・デュヴァルは、« Au dénouement était le Verbe : origine, inversion et parodie chez Proust » (「最後に言葉があった：プルーストの起源、逆転、パロディ」)において、リシャールを引用しつつ、「プルーストは冒涇的な聖書の書き換えを通して、パロディの不敬な美学によって聖書を復活させ、創造的な行為を行った」<sup>16</sup>と述べている。そして、このことをソドムとゴモラの物語およびアブラハムとイサクの物語の逆転を通して検証している。

ブルーストは、祭司のように創世記のテキストを二つに分け、それを『失われた時』の初めと中心に配分し、これらの断片を対面させて、ソドムにアブラハムの子孫を割り当て、イサクの犠牲の際にアブラハムから「離れていく」天使たちを導入する。二つに分かれたテキストは、逆転によって再接続され、また、イベルテキストとイボテキストは、パロディによって同時に結びつけられ、区別される。同様に、『コンプレ』はマドレーヌのエピソードによって二つに分けられ、それが二つの部分を同時に結びつける。母親によって読まれる『フランソワ・ル・シャンピ』は最後の巻に現れ、さらに『失われた時』の全ての原材料は、「コンプレ」の物語と『時間の再発見』の美学理論の間に分配される。<sup>17</sup>

三者とも、それぞれに« se départir d'Isaac »ではなく、« se départir du côté d'Isaac »という表現に、なにか歯切れは悪いが、積極的な意味を見出している。

## 6 各国語への翻訳

それでは、この言い回しが各国でどのように翻訳されているのか確認したい。日本語以外の言語については、Google翻訳、DeepL翻訳、ChatGPT翻訳の三つを使って大まかにフランス語に翻訳してから確認した。

### 日本語訳

スワン氏が私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製版画に出てくる、アブラハムが、妻のサラにイサクのそばから離れるように告げる仕草を思わせた。(吉川訳)<sup>18</sup>

スワン氏が私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製のアブラハムがその妻サラに向かって、イサクのそばから身を離せと告げるときのあの身振りをしながら、(鈴木訳)<sup>19</sup>

スワン氏がまえに私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製画にあるアブラハムが妻のサラにその子イサクのそばから身を離せと告げているあの身振りで、(井上訳)<sup>20</sup>

スワン氏がかつて私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製画にある、アブラハムが妻のサラにその子イサクと袂をわかれてと告げているあの身振りで、(淀野・井上訳)<sup>21</sup>

### 英語訳

standing like Abraham in the engraving after Benozzo Gozzoli which M. Swann had given me, telling Sarah that she must tear herself away from Isaac. Many years have passed since that night.<sup>22</sup>

Debout comme Abraham dans la gravure d'après Benozzo Gozzoli que M. Swann m'avait donnée, disant à Sarah qu'elle devait se détacher d'Isaac. De nombreuses années se sont écoulées depuis cette nuit-là.

(サラにイサクから離れなければならないと言っている)

### イタリア語

nel gesto di Abramo mentre dice a Sara che deve distaccarsi



da Isacco nell'incisione dal quadro di Benozzo Gozzoli che mi aveva regalato Swann.<sup>23</sup>

dans le geste d'Abraham, disant à Sarah qu'elle doit se détacher d'Isaac, dans la gravure du tableau de Benozzo Gozzoli que Swann m'avait offerte.

(サラにイサクから離れなければならないと言っている)

スペイン語

en un grabado copia de Benozzo Gozzoli, que me había regalado Swann, dice a Sara que tiene que separarse de Isaac.<sup>24</sup>

dans une gravure copie de Benozzo Gozzoli, que Swann m'avait offerte, il dit à Sarah qu'elle doit se séparer d'Isaac.  
(彼はサラにイサクから離れなければならないと言っている)

ポルトガル語

segundo a gravura de Benozzo Gozzoli que o Sr. Swann me dera, dizia a Sara que era preciso se separar de Isaac. Faz muitos anos que isso aconteceu.<sup>25</sup>

selon la gravure de Benozzo Gozzoli que M. Swann m'avait donnée, il disait à Sarah qu'il était nécessaire de se séparer d'Isaac. Cela fait de nombreuses années que cela s'est passé.  
(彼はサラにイサクから離れることが必要だと言っていた)

ドイツ語

Seine Haltung war wie auf dem Stich nach Benozzo Gozzoli, den Monsieur Swann mir geschenkt hatte, die Haltung Abrahams, als er Sarah sagt, sie solle sich von Isaaks Seite entfernen.<sup>26</sup>

Sa posture était comme celle d'Abraham dans la gravure d'après Benozzo Gozzoli que Monsieur Swann m'avait offerte, lorsqu'il dit à Sarah de s'éloigner d'Isaac.

(アブラハムがサラにイサクから離れるようにいうときの)

Den er sich um den Kopf zu wickeln pflegte, seit er an Neuralgien litt, mit der Geste in dem Stich nach Benozzo Gozzoli, den mir Swann geschenkt hatte, als Abraham Sarah

befiehlt, von Isaaks Seite zu weichen.<sup>27</sup>

Qu'il avait l'habitude d'enrouler autour de sa tête depuis qu'il souffrait de névralgies, avec le geste dans la gravure d'après Benozzo Gozzoli que Swann m'avait offerte, lorsque Abraham ordonne à Sarah de s'éloigner d'Isaac.

(アブラハムがサラにイサクから離れることを命じるときの)

中国語

他的動作就象斯萬先生送給我的那幅版畫中的亞伯拉罕 1，那幅版畫是根據伯諾索-戈索裡 2 的原作復制的，畫中亞伯拉罕要薩拉狠心捨棄伊薩克。這已經是多年前的事了。當年燭光漸升的那面樓梯旁的大牆早已蕩然無存。有許多當年我以為能在心中長存不衰的東西也都殘破不堪，而新的事物繼而興起，衍生出我當年意料不到的新的悲歡；同樣，舊的事物都變得難以理解了。<sup>28</sup>

Son geste ressemblait à celui d'Abraham dans la gravure que M. Swann m'avait offerte, une reproduction de l'œuvre originale de Benozzo Gozzoli, où Abraham demandait à Sarah de renoncer cruellement à Isaac.

(サラに残酷にもイサクのことを諦めるように言っている)

ギリシャ語

μέ τη χειρονομία του Ἀβραάμ ὁ ἔχειν τὴν γχραβούρα, ποὺ μοῦ εἶχε δώσει ὁ κύριος Σονάν, τῇ Βασισμένην πάνω στὸν πίναχα τοῦ Μπενότσο Γκότσοι, τῇ στιγμή που λέει στὴ Σάρα ν' ἀποχωριστεῖ τὸν Ἰσαάκ.<sup>29</sup>

Dans le geste d'Abraham dans cette gravure que M. Swann m'avait donnée, basée sur la peinture de Benozzo Gozzoli, au moment où il dit à Sarah de se séparer d'Isaac.

(アブラハムがサラにイサクから離れるように言っている)

韓国語

고리의 백와인지라고 사라에게 말하는 하에서, 라 라 이 의제 그만아들 이삭과 떨어지라고 사라에게 말하는 몸짓을 하면서 사계셨다.

고리의 백와인지라고 사라에게 말하는 몸짓의 제 그만아들 이삭과 떨어지라고 사라에게 말하는 몸짓을 하면서 지계셨다.<sup>30</sup>

Il se tenait là, faisant un geste semblable à celui d'Abraham, disant à Sarah qu'elle devait se séparer de son fils Isaac.  
(サラに息子のイサクから離れなければならないと言っている)

ただし韓国語版では脚注において原文の双方向性について示唆されている<sup>31</sup>。

すべて「イサクから離れるように」と簡潔に翻訳されており、原文の曖昧なニュアンスを反映した翻訳は見当たらなかった。

## 7 結び

プルースト研究者ではない5人のフランス人にこの段落だけを別々に読んでもらい、父親が「イサクの方へ行くように」と言っているのか、それとも「イサクから離れるように」と言っているのかを尋ねたところ、3人(20代)は「イサクの方へ行くように」と解釈した。一人(40代)は最初「イサクの方へ行くように」と解釈していたが、後に「イサクから離れるように」と訂正した。もう一人(60代)は、「文法的には『イサクから離れるように』となるが、聖書に詳しくないため、他の解釈が可能かどうかはわからない」と答えてくれた。実際、「se départir du côté de」ではなく、「partir du côté de」であれば「～の方へ行く」という意味になるため、誤読されやすい表現である。

さらに、この第一巻のタイトルが *Du côté de chez Swann* (『スワン家の方へ』) であるため、「du côté de」を「～の方へ」と読みたくなる傾向がある。また、この段落の文脈では、父親が「母親の方へ行くように」と言っているため、「離れるように」という仕草で子供の方へ行っておやり」となると整合性が取れなくなる。原文で読む限りでは、誤読に気付かないまま過ごすことも可能な表現だが、翻訳する際には、どちらの方向なのかを明確にしなければならない。

では、誤読を招く悪文かという点、そうでもない。リチャールが「« ce petit trouble sémantique »

(ちょっとした意味上の混乱)」と述べているように、これは読者を故意に「混乱させる」表現である。一方で、リチャールとデュヴァルが指摘するように、『創世記』の世界を意識的かつ意図的に逆転させるというトリックが含まれている。『創世記』においては、アブラハムはイサクを燔祭とするが、この場面でアブラハムにたとえられる父親は主人公に救いの手を差し伸べる。あるいは、『創世記』において「ソドムとゴモラ」の民は業火に焼かれ一掃されるのだが、小説の中盤では、ソドムの民が世界に散らばっていくことになる。そして今日、『創世記』において主がユダヤの民に約束した地は紛争の最中にある。『創世記』で焼き尽くされ滅びたはずの「ソドムとゴモラ」の民は、決して失われてはいない。

実際、子供には「この子と一緒に一緒に行っておやり」と言う父親の姿が、それでも恐ろしいものに映っていたのかもしれない。本来、この場面で父親は子供に優しくしようとしているはずなのだが、その行為によって無意識のうちに子供に害を及ぼしていることに気づいていない。もしかしたら、父親は「一緒に行っておやり」と口では言いながら、内心では「面倒な子供だ」と思っていたのかもしれない。

そもそも、人の思考や行動が常に整合性を持つとは限らない。言葉と行動が一致しないことなど、日常茶飯事である。この曖昧でわかりにくい « se départir du côté de » という表現は、伝えがたいものをあえて伝えようとしているともいえる。練り込まれた必然性を持ち、作品を象徴する表現の一つでもあるともいえる。伝えられないものを伝えようとし、理解しきれないものをそのまま提示する、文学は、そうしたことを可能にできるのかもしれない。

(あおやぎ・りさ 一般教育等／フランス文学)  
(2024年11月7日 受理)

## 註

Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu* I ~ VI,

« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1987-1989. Abréviation : I ~ IV.

- 1 « On ne pouvait pas remercier mon père ; on l'eût agacé parce qu'il appelait des sensibleries. Je restai sans oser faire un mouvement ; il était encore devant nous, grand, dans sa robe de nuit blanche sous le cachemire de l'Inde violet et rose qu'il nouait autour de sa tête depuis qu'il avait des névralgies, avec le geste d'Abraham dans la gravure d'après Benozzo Gozzoli que m'avait donnée M. Swann, disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Isaac. Il y a bien des années de cela. Le muraille de l'escalier où je vis monter le reflet de sa bougie n'existe plus depuis longtemps. » (I, 36-37)
- 2 « On ne pouvait pas remercier mon père, on ne pouvait pas l'embrasser, on l'aurait agacé, il appelait cela des manifestations ridicules. Mais je ne crois pas qu'on puisse sentir vers un autre être un élan de reconnaissance plus infinie que j'éprouvai ce soir-là pour lui. Il y a bien des années de cela. La maison où cela se passait n'existe plus. Et l'image qu'il y en a dans mon souvenir est peut-être la seule « épreuve » qui en reste encore et qui sera bientôt détruite. La possibilité de telles heures est à jamais anéanti. » (*Cahier 6*, f° 47 r° : I, 674-675)
- 3 « On ne pouvait pas remercier mon père, on ne pouvait pas le remercier, on l'aurait agacé, il appelait cela des manifestations ridicules. Mais je ne pense pas qu'on puisse éprouver pour un autre être un sentiment de reconnaissance plus grand que celui que j'éprouvai ce soir-là pour lui. Je restais là sans oser parler, il était encore devant moi, grand, dans sa robe de nuit blanche sous le cachemire de l'Inde qu'il nouait autour de sa tête depuis qu'il avait des névralgies, avec sa barbe noire avec le geste d'Abraham quand il dit à Sarah de se départir. Il y a bien des années de cela. L'escalier où je vis monter sa lumière est détruit depuis bien longtemps. » (*Cahier 8*, f° 40 r° : I, 691-692)
- 4 「スワン氏が私にくれたベノッツォ・ゴッツォリの複製版画にある」のモデルとされるアブラハムのフレスコ画は、ピサのカンボサントに存在すると思われるが、ラスキンの時代にはすでにひどく劣化していたらしい。この場面を描いた現物のフレスコ画は、おそらく現在では見るができない。このフレスコ画と版画については後ほど取り上げる。
- 5 « Quand je m'éveillai, le lit de Maman était vide. Elle s'était levée sans que je l'entendisse. Mais sur ses draps le soleil jouait comme la promesse de tous les plaisirs d'une belle journée, comme un bonheur palpable ; et sur la table un petit mot écrit par moment - Quand mon loup s'éveillera qu'il s'habille vite, sa maman l'attend au jardin. J'ouvris les volets, les rayons de soleil qui avaient déjà abandonné le ras de sol, la terre retournée des plates-bandes de pensées et d'héliotropes qui baignaient dans une ombre chaude, encore étincelantes et comme humides du soleil qui les avait quittées, et que le jardinier se préparerait à arroser, faisaient une échelle d'or le long du treillis du mur qui semblait posée du ciel par les anges pour leur permettre de venir cueillir les roses et les capucines et qui de l'autre côté grimait le long de la maison jusqu'au lit de Maman. » (*Cahier 6*, f° 51 r° : I, 677)
- 6 « Mais après que Maman se fut couchée et endormie, la nuit magique du Champi sous la forêt enchantée par le clair de lune, continuait pour moi dans cette chambre où j'étais couché à l'ombre du marronnier dont le clair de lune découpait en noir les branches sur mon lit. » (*Cahier 8*, f° 44 r° : I, 694)
- 7 « Quelquefois, comme Ève naquit d'une côte d'Adam, une femme naissait pendant mon sommeil d'une fausse position de ma cuisse. Formée du plaisir que j'étais sur le point de goûter, je m'imaginais que c'était elle qui me l'offrait. Mon corps qui sentait dans le sien ma propre chaleur voulait s'y rejoindre, je m'éveillais. Le reste des humains m'apparaissait comme bien lointain auprès de cette femme que j'avais quittée il y avait quelques moments à peine ; ma joue était chaude encore de son baiser, mon corps courbaturé par le poids de sa taille. » (I, 4-5)
- 8 吉川一義氏の示唆による（関西ブルースト研究会 京都大学 2024年10月5日）  
Marcel Proust, *Du côté de chez Swann*, Grasset, 1913, p. 45.
- 9 « Ah ! si j'avais encore les forces qui étaient intactes encore dans la soirée que j'avais alors évoquée en apercevant *François le Champi* ! C'était de cette soirée, où ma mère avait abdiqué, que datait, avec la mort lente de ma grand-mère, le déclin de ma volonté, de ma santé. Tout s'était décidé au moment où, ne pouvant plus supporter d'attendre au lendemain pour poser mes lèvres sur le visage de ma mère, j'avais pris ma résolution, j'avais sauté du lit et étais allé, en chemise de nuit, m'installer à la fenêtre par où entraient le clair de lune jusqu'à ce que j'eusse entendu partir M. Swann. Mes parents l'avaient accompagné, j'avais entendu la porte du jardin s'ouvrir, sonner, se refermer... » (IV, 621)
- 10 John Ruskin, *The Work of John Ruskin*, Library Edition, George Allen, Londres, 1903, t. IV, p. 316.
- 11 « Comme Isaac, il s'attend à ce que s'abatte sur lui le

couteau de son père ; mais comme Ismaël, il va avec sa mère ; et finalement, comme Lot, il se dirige du côté de la mère, de sorte que sa mère peut « se départir du côté » du fils en le rejoignant. »

Sophie Duval, « Au dénouement était le Verbe : origine, inversion et parodie chez Proust » dans *L'Origine des textes*, Presses universitaires de Bordeaux, 2003.

<https://books.openedition.org/pub/50540> (2024.10.1)

- 12 Lasinio Carlo (Treviso, 1757-1759) Pisa, 1838  
IL SACRIFICIO D' ABRAMO (LE SACRIFICE D' ABRAHAM)
- 13 « ... You cannot guess (he writes to his father, May 15.) how these men must have read their Bible, how deeply the patriarchal spirit I have been drawing from Benozzo's life of Abraham, which is as full and abundant as the scripture itself, nothing missed, though a good deal added. Little Ishmael fighting little Isaac to Sarah's great indignation, being one of such passages, — a comment on the 'saw the son of the Egyptian mocking' of the *Bible* [*Genesis* xxi. 9]; but this is succeeded by the most heavenly Hagar in the Wilderness. I shall set to work on her to-morrow. Today I have been finishing an easy bit (easy because small and well made out)— *Abraham parting from the Angels* when they go towards Sodom. It is a beautiful observance of the scriptural history that while three angels came to Abraham, only two come to Sodom at even [*Genesis* xviii. 2, xix. 1]. In the fresco the central angel is rising, looking back towards Sodom with his hand raised in the attitude of condemnation, afterwards adopted by M. Angelo in the *Judgment*. The two angels turn towards Sodom, one with his eyes steadfast on the city, the other looking back to Abraham. The two angels turn towards Sodom, one with his eyes steadfast on the city, the other looking back to Abraham. The latter turns away, with his hands folded in entire faith and resignation, but with such a quivering distress about the lips and appeal for pity in the eye that I have had the tears in mine over and over again while I was drawing it. The plaster on which is this passage has already risen in a blister from the wall, and will be blown into the Arno in dust before the year is out. » J. Ruskin, *Works*, Library Edition, George Allen, Londres, 1903-1912, t. IV, p. xxx,
- 14 « Benozzo Gozzoli (1420 ou 1422-1497), peintre florentin l'un des auteurs des fresques du Campo Santo à Pise, détruites durant la dernière guerre. Plusieurs d'entre elles représentent des épisodes de la vie d'Abraham, mais on n'y trouve pas la scène évoquée par Proust, qui ne figure pas non plus dans le texte de la Genèse, à moins qu'ils ne s'agissent du départ d'Agar et de son fils Ismaël (voir G. Rossi et G.P. Lasinio, *Peintre a fresco dei Camposanto di*

*Pisa*, Firenze, Tipographia alla insegna di Dante, 1832). La référence culturelle semble ici réfondue pour les besoins de l'histoire familiale. L'emploi archaïsant du verbe « se départir » (peut-être induit de l'anglais parting, dans la légende d'un autre croquis pris par Ruskin au Campo Santo : *Abraham parting from the angels* ; voir J. Ruskin, *Works*, Library Edition, George Allen, favorise une ambiguïté lexicale significative ; l'expression « se de partir du côté de » amalgame les sens de « se départir de » (soit : « se séparer de ») et de « partir du côté de » qui a un sens opposé, plus adapté à la scène puisque le père ordonne à la mère de rejoindre l'enfant. L'ambiguïté donne à entendre que le père sépare encore au moment où il réunit, et suscite l'image de Abraham sacrificateur. » I, 1114-1115.

- 15 « L'effacement de cette déchirure (celle de la séparation) ne va pas cependant sans comporter un aspect négatif. Marcel se sent sacrilège, profanateur vis-à-vis de sa mère : « Il me semblait que je venais d'une main impie et secrète de tracer dans son âme une première ride et d'y faire apparaître un premier cheveu blanc » (S., I, p. 39). Lui-même, à la suite de cette première abdication parentale, se sent, se sait condamné à une éternelle enfance. C'est que seul le Père, par l'imposition de la loi (et non par l'arbitraire du caprice), avec la menace qui l'accompagne, pourrait sauver l'enfant de cette réémersion trop complète dans le monde maternel. L'indulgence du père dans la scène de Combray est donc en réalité un abandon du fils ; elle le condamne à ne jamais vraiment s'émanciper, à ne jamais pouvoir sortir de son cercle enchanté (et toujours reconstruit : tissé, nappé, souvenu, écrit autour de lui). Bien des détails, dans la scène du baiser, confirmeraient cette lecture. Ainsi l'aspect même du père : affaibli de névralgies, féminisé par une coiffure étrange (un turban violet et rose). Puis l'appel au double registre métaphorique de l'art et de la religion. Laissons la gravure de Gozzoli, qui n'a peut-être jamais existé (cette absence alors pourrait elle-même faire sens). L'invocation du mythe d'Abraham est en revanche essentielle, dans la mesure où celui-ci décide de sacrifier son fils à la Loi, et ce faisant le sauve, le fait être. Mais Proust n'utilise ce mythe que pour en renverser le sens, et ceci peut s'apercevoir dans la lettre même du texte proustien : « Avec le geste d'Abraham... disant à Sarah qu'elle a à se départir du côté d'Isaac. » Se départir signifie « faire ses adieux », et implique une séparation. Mais du côté de, syntagme par ailleurs si violemment proustien, indique au contraire l'inclination souhaitée, l'attachement retrouvé, l'appartenance. A travers ce petit trouble sémantique le baiser de Sarah n'est plus ressenti comme geste d'adieu, mais au contraire de reprise,



- de réenveloppement irrémédiable. Sur ceci voir Samuel M. Weber, « Le madrépore », *Poétique* 13, p. 28 sq. » Jean-Pierre Richard, *Proust et le monde sensible*, Seuil, « Points », 1974, note p. 278.
- 16 « Ainsi Proust, par sa réécriture blasphématoire de la Bible, la ressuscite par l'esthétique profanatrice de la parodie et accomplit un acte créateur : le Verbe ironique dénoue l'opposition entre vénération et dégradation, et ranime le passé le plus lointain, le temps perdu mythique, à l'intérieur du présent grâce à la mémoire intertextuelle. » Sophie Duval, *op.cit.*
- 17 « Comme le sacrificateur, Proust partage en deux le texte de la Genèse distribué au début et au centre de la Recherche et il dispose ces fragments en vis-à-vis en attribuant à Sodome la postérité d'Abraham et en introduisant les anges « parting from » Abraham dans la ligature d'Isaac. Coupé en deux, le texte est raccordé par l'interversion, de même qu'hypertexte et hypotexte sont simultanément associés et discriminés par la parodie. De même encore, Combray est coupé en deux par l'épisode de la madeleine qui en même temps relie les deux morceaux ; François le Champi, lu par la mère, se retrouve dans le dernier volume ; et tout le matériau primitif de la Recherche se trouve réparti entre le récit de « Combray » et la théorie esthétique du Temps retrouvé. » Sophie Duval, *op.cit.*
- 18 マルセル・プルースト (吉川一義訳) 『失われた時を求めて』 1巻 岩波文庫 2010年 p. 91.
- 19 マルセル・プルースト (鈴木道彦訳) 『失われた時を求めて』 1巻 集英社 1996年 p. 73.
- 20 マルセル・プルースト (井上究一郎訳) 『失われた時を求めて』 1巻 ちくま文庫 1992年 p. 61.
- 21 マルセル・プルースト (淀野隆三、井上究一郎訳) 『失われた時を求めて』 1巻 新潮社 1979年 p. 39.
- 22 *In Search of Lost Time*  
<https://antilogicalism.com/wp-content/uploads/2019/04/lost-time.pdf> (2024.10.1)
- 23 Marcel Proust, M. T. Nessi Somaini (Traduction), *Dalla parte di Swann*, Format Kindle, BUR, 23 mai 2012
- 24 Marcel Proust, Libros Tauro (traduction), *En busca del tiempo perdido*,  
<https://web.seducoahuila.gob.mx/biblioweb/upload/Proust,%20Marcel%20-%20En%20busca%20del%20tiempo%20%20I.pdf> (2024.10.1)
- 25 Marcel Proust, *Em Busca do Tempo Perdido*,  
<https://projetophronesis.files.wordpress.com/2012/06/proust-em-busca-do-tempo-perdido-1-no-caminho-de-swann.pdf> (2024.10.1)
- 26 *In Swanns Welt I*, Eva Rechel-Mertens, werkausgabe edition suhrkamp, 1964, p. 53.
- 27 *Auf dem Weg zu Swann*, Bernd-Jürgen Fischer, Reclam, 2022, p. 56.
- 28 追憶似水年華 第一部 在斯萬家那邊 第一卷 貢布雷 (1)  
<http://www.b111.net/novel/13/13714/3342456.html> (2024.10.1)
- 29 Marcel Proust, *Από τη μεριά του Σουάν*,  
[https://eclass.uoa.gr/modules/document/file.php/PSPA254/%CE%9C%CE%B1%CF%81%CF%83%CE%AD%CE%BB\\_%CE%A0%CF%81%CE%BF%CF%8D%CF%83%CF%84\\_%CE%91%CE%BD%CE%B1%CE%B6%CE%B7%CF%84%CF%8E%CE%BD%CF%84%CE%B1%CF%82\\_%CF%84%CE%BF%CE%BD\\_%CE%A7%CE%B1%CE%BC%CE%AD%CE%BD%CE%BF\\_%CE%A7%CF%81%CF%8C%CE%BD%CE%BF.pdf](https://eclass.uoa.gr/modules/document/file.php/PSPA254/%CE%9C%CE%B1%CF%81%CF%83%CE%AD%CE%BB_%CE%A0%CF%81%CE%BF%CF%8D%CF%83%CF%84_%CE%91%CE%BD%CE%B1%CE%B6%CE%B7%CF%84%CF%8E%CE%BD%CF%84%CE%B1%CF%82_%CF%84%CE%BF%CE%BD_%CE%A7%CE%B1%CE%BC%CE%AD%CE%BD%CE%BF_%CE%A7%CF%81%CF%8C%CE%BD%CE%BF.pdf) (2024.10.1)
- 30 Marcel Proust, 김・ヒョン김희영 역訳, 잃어버린 시간을 찾아서, 민운社민음사, 2012, pp. 72-73.
- 31 注  
프루스트 연구자들에게는 당혹스러운 부분이다. 15세기 이탈리아 피렌체 화가였던 베로초 고촐리는 구약성서를 주제로 벽화 23편을 남겼지만(러스킨이 언급하는 아브라함의 생애』도 포함) 이 텍스트에 걸맞은 작품은 어디서도 찾아볼 수 없으며, 게다가 아브라함이 사라에게 아들 이삭과 떨어지라고 번역한 동사 se départir 가 피로는 ... 헤어진다. ... 와 떨어지다'를 의미하기도 하고, 로는 ...를 해가다 (partir du côté de)'로 해석될 수 있기 때문이다.  
*Ibid.* p. 72.  
C'est une partie déroutante pour les chercheurs de Proust. Le peintre florentin du XVe siècle, Benozzo Gozzoli, a laissé 23 fresques sur le thème de l'Ancien Testament (y compris la 'Vie d'Abraham' mentionnée par Ruskin), mais aucune œuvre correspondant à ce texte ne peut être trouvée, et de plus, le verbe 'se départir' utilisé pour traduire le geste d'Abraham demandant à Sarah de se séparer de son fils Isaac, peut signifier à la fois 'se séparer' et 'partir' dans un sens plus large, ce qui rend la traduction ambiguë.  
これはプレイヤード版の中に従ったものと考えられる。